

# 生き甲斐といふ事

## 一 利己心のすすめ

一

生き甲斐とは生ける標、生ける證し、生の充實感である

生き甲斐が無い、探し求める手掛りする見附かぬといふ心理が、今日一種の不安感として、社會の底流に潜んでゐる様に思はれる

←

この原因は次の三現象に分けられる（昭・20〜昭・44の時代の推移）

一、戦争に對する罪惡感の消滅 ↓ 十年位前かの効力を失ふ

二、進歩主義の挫折 ↓ 大衆社會・敏衆社會・高度工業化社會の到來が平和や民主主義の消極概念に過ぎぬことと暴露

三、大衆社會・敏衆社會の出現 ↓ 画一化・空虚感・疎外感、に不快感を感じる高度工業化社會

←

人々は不快感を感じると言ひつつ、結構、楽しんでゐるのではなからうか

戦争に對する罪惡感も進歩主義も、之せ生き甲斐であるとする、そのことを暴露した高度工業化された敏衆とさせる大衆社會における人間の画一化・空虚感・疎外感もまた似せ物ではないか

日本人および日本社會の底流にある偽善と感傷を粉砕する思相の甚だ盤は、我が國においては甚だ脆弱

二

「鰯の頭も信心」 ↓ 「鰯の頭にもせよ」とかに生き甲斐のよすかと

求めずにはぬられぬ「弱き心」

・ 生き甲斐のよすかとしてなう 鰯の頭も満足する  
「欲の無き心」

←

利己心の缺如 ↓ 現代日本人の短所と見る

利己心といふ臭い物の存在を自分の内に見出す事を恥ひれてそれを隠す「蓋」として至る處に鰯の頭を押し求める

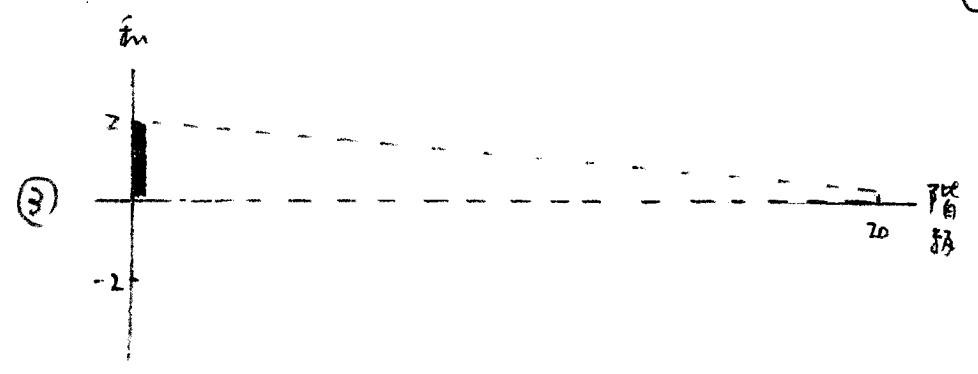
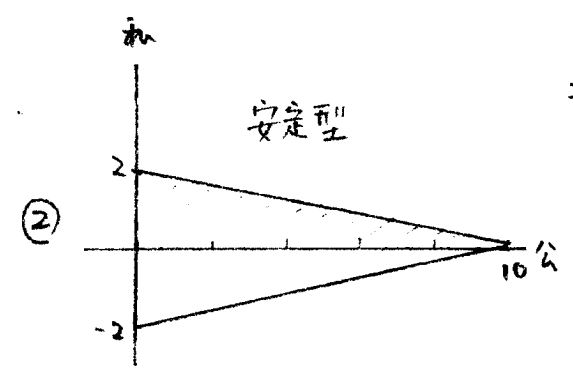
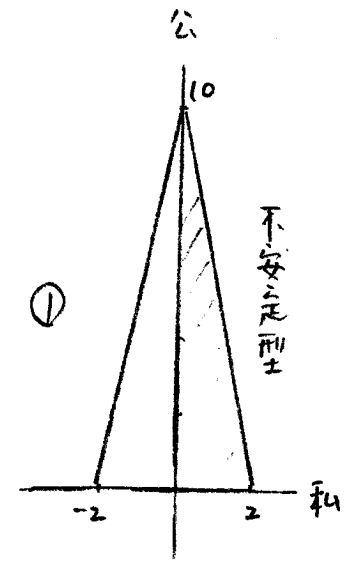
・ 欧米人はもちろん他のアジア、アフリカの諸民族は、自分達の「小市民的利己心」に、後ろめたさと感じることはいさしもないとして、自分達の「小市民的利己心」を保護し保護するの、国家だと考へる、またそれらの「利己心」がふつかり合ふ場合の紛争を調停、管理するのも国家だと考へてゐる。だから国家権力を悪く見なす考へ方は一般的ではない

・ 欧米では「政経分離」が下されてゐる ↓ 経済主義  
日本では、あらゆる不満と期待が政治に懸けられる ↓ 政治主義

・ なぜ日本人は利己心か乏しいのか、その表裏を後ろめたく思ふのか

明治維新以後の場合

外敵の圧力に對し、急速に中央集権的な近代國家を造り上げねばならぬといふ要請が、利己心をすべて悪くし、時にのみ身を立てゝ家の名を顕彰するものとして、稱美された（自己欺満に氣がつきにくい状況であつた）





個人の確立以前 ✓

文化・伝統

自然のサイクル



平俗な

生き甲斐

〈個人主義〉 ✓

神喪失・社会との対立

平俗な生き甲斐は

もはや見出せない



精神の政治学を心得ること

その上での

精神のエンジニアリング

利己心と利己主義の違いは？

政治・好色・夜鳥風月 は させ ぬめるのか？